

自我と社会の相互作用

——ミード理論の批判的考察——

齊 川 富 夫

序 課題

およそ、社会科学にとって、個人と社会の相互関係は永遠の研究テーマであるとさえいえる。今日、個人の創造性、主体性、人間による能動的社會形成という側面を前面におしだして理論を展開しているのがシンボリック相互作用論である。

シンボリック相互作用論は、何よりもシンボルを媒介とした相互作用を視点の中心に据え、そこから社会過程を通じての人間の形成と、人間の主体的はたらきかけによる社会の形成という人間と社会の相互形成関係をあきらかにしようとする立場であるといえる。

この理論は、ジェームズ、ボールドウィン、デューイ、タマス、ズナニエツキ、クーリーといった人物をその源流としているが、とりわけ、G. H. ミードの理論をその中心的源泉としている。これらの理論は1930年代までアメリカにおいて有力な潮流を形成していたが、ミードの死後、一時殆んどかえりみられず、停滞をつづけていた。しかし、1960年代から70年代にかけて、自我論、アイデンティティ論、役割理論、準拠集団論等々の発展、また、T. パーソンズに代表される構造機能主義理論に対する対抗的立場の台頭といった理論状況の出現と共に見直され、新たな理論的展開をなすことになったのである。

本稿では、シンボリック相互作用論、特にその源流である G. H. ミードの議論の考察を通じて、人間と社会の相互作用、相互形成の問題について検討を行なうことを課題として論を進めていくことにする。

一 自我の形成と思考の過程

自我には、それがそれ自身にとって対象だという特色がある⁽¹⁾。かれ自身に対して他の個人達がとる態度を採用したときにのみ、かれは、かれ自身にとっての対象となる⁽²⁾。かれが他人の態度を採用できるようになり、他人達が行為するように自分自身に向けて行為するようになるにつれてかれは自我となる⁽³⁾。人間が自分自身を個人や人間として知覚するようになるためには、自分自身の対象となり、対象としての自分自身の経験に参加しなければならないが、他の個人達との相互作用を通じてのみ——つまり、自分自身に対する他者達の態度を採用することによってのみ——人は自分自身の対象となれるのである⁽⁴⁾。このように自我の発生過程は、集団内での個人達の相互作用を含み、集団の先在を含む社会過程である⁽⁵⁾。

ところで、自我の十全な発達にはふたつの一般的段階がある。第一が遊戯の段階である。この段階では、ある個人の自我は特定の他者の役割を取得することによって形成される。しかし、十全な自我の発達の第二段階は、特定の他者の態度を取得するだけでなく、複数の他者の態度を組織化、一般化して取得する段階である。これがゲームの段階であり、この段階で、個人は一般化された他者の態度を取得できる。

ある人にかれの自我の統一性を与える組織化された共同体もしくは社会集団を一般化された他者と呼んでよかろう。一般化された他者の態度は全共同体の態度である⁽⁶⁾。このような組織化され、一般化された集団の構成員の態度を内在化していくことで——一般化された他者の態度を取得することによって、個人は、はじめて全体的視野に立つことができるようになるのである。

さて、一般化された他者が形成されていく過程は、自我意識が発達していく過程でもある。自我意識は、対象としての自我の認知や出現に応じるものである⁽⁷⁾。自我意識は、その集団の他者達に属している一群の明確な反応を自分自身のなかで呼びおこす能力と関連しており⁽⁸⁾、自分自身に対する他者の態度を採用し、あるいは感得することが自我意識を構成していく⁽⁹⁾。このように自我意識的になることで、はじめて人間は自覚的に行為できるようになるのである。「高級な社会過程のなかでのみ、すなわち、ずいぶん発達した形態の社会

環境もしくは社会状況に関連したときにのみ、人間の全体が自分自身にとっての対象となり、したがって自我意識〔自覚〕的になる。……いわゆる自我意識〔自覚〕的な経験や行動のばあい、われわれは、他の個人達をも考慮しながら、だが、とくにわれわれ自身を考慮しながら行動し反作用する。そして自我意識〔自覚〕的であるとは、基本的には、他の個人達に対する自分の社会関係のおかげで、〔自分が〕自分の自我にとっての対象になることである⁽¹⁰⁾」。

またミードは、自我の本質として認知的側面を強調して次のように述べる。「自我の本性を考えるときには、思考作用が占める中心的位置を強調しなければならない。自我意識は、運動神経を随伴させている情緒的な経験よりもいっそう、自我の核心や萌芽の構造をあたえる。だから自我の核心は情緒的現象というよりも、本質的には認知的現象である。……それは、思考活動を成り立たせていて、したがってそれとの関連で思考も反省も進行していく内面化された身振り会話のなかに、自我の本質がある⁽¹¹⁾」。

思考とは、個人が他者の態度を取得するとき、とりわけ、集団全体の共通の態度を取得するときの自我との会話の過程である。そしてそのとき、かれが用いるシンボルは共通のシンボルとなっており、集団全体にとって共通の意味をもつことになる⁽¹²⁾。つまり、思考過程もしくは思考活動は、個人によっておこなわれるその個人と一般化された他者とのあいだの会話であるといえる⁽¹³⁾。

ところで、知能は、中枢神経系の生理学的メカニズムをとおして、一定の問題的な環境状況のなかで可能なさまざまな択一的反応のなかから、そのひとつを慎重に選択するはたらきをもつ⁽¹⁴⁾。知能は単純な反応の組合せあるいは連鎖を、あたえられた環境上の問題のもっとも適切で調和のとれた解決を、個人によって可能にするように組織化することができる⁽¹⁵⁾。このように、知能的行為の過程は、本質的にさまざまな択一性のなかからの選択の過程であり、知能とは、主として選択性にかかわることがらである⁽¹⁶⁾。

知能や思考の過程は、従来の習慣的行為のやり方がゆきづまりをみせる問題状況において、行為を継続させるために作動する過程でもある。だから知能の過程は持続的に新しい環境に自身を適応させる行為の過程であるし⁽¹⁷⁾、認識とは、その環境に対する有機体の選択的態度の発達であり、そのような選択に付

随する再調整に他ならないことになる。思考の過程とは人が異なったやり方で行為することができるように環境の再構成を可能ならしめるようにする過程であるといえる⁽¹⁸⁾。そして、行為に適応される反省的自我意識は、問題を科学的に叙述し、科学的方法を認識し利用するという形において最高の表現に達する。すなわち、科学は知能の最高度の形態を表現するものであり⁽¹⁹⁾、新しい環境に持続的に適応する方法であるとされるのである。科学とは行為の一つの方法であり、人間やコミュニティがその環境をコントロールするための道具的手段とみなされるのである⁽²⁰⁾。

このような有機体と環境との相互作用を媒介するものとしての思考という考え方は、プラグマティズムの真理論につながる。すなわち、科学的方法に基づく問題解決による真理の証明——仮説とその検証というプラグマティズムの論理と重なり合うものである。「プラグマティズムの教義は、いわゆる“真理”の検証を仮説そして仮説のはたらきのなかに見出す。“仮説のはたらき”というのは、問題によって禁止されていた過程が、この検証という視点からみて、再びはたらきを始め進行していくことができることを意味する。……それを行動主義的用語で述べるならば、真理の検証とは、禁止されていた過程を継続させることが可能であるということの意味する。……真理の検証とは、問題によって抑止されていた過程が継続的にはたらくことのなか存するのである⁽²¹⁾」。このように思考（科学的方法・認識において最高の表現形態をとる）は社会的レベルでの葛藤や妨害を取り扱うために利用されるプラグマティックで道具的な性質を有するものとされるのである。

以上、これまでの論述から、ミードが知能や思考といった精神活動を社会過程に先行して発生したり、行為から分離できるものとして把握しているのではないことが理解できる。それは有機体と環境との相互作用というレベルにおいて把握されるべきものとなっている。人間の知能や思考は個人と環境の間の関係を安定的なものにするための道具とみなされている。そうした視点は、有機体の環境への合理的適応という視点から生物体の行動を考察する機能主義心理学と共通する立場に立っていたことを示すものといえよう。われわれはプラグマティストにして機能主義心理学者ミードという姿を明確に把握しておかなけ

ればならないであろう。

二 個人と社会の相互作用

一般化された他者の取得の所で触れたように、組織化され一般化された共同体の態度を個人の内部にとり入れることが自我の発達的前提であった。個人は「かれが所属している組織化された社会集団の態度を、そういう集団が従事している組織化された協同の社会活動を念頭に置きながらとりあげてはじめて、かれは完全な自我を発達させるし、かれが発達させてきた完全な自我を保持しつつづける⁽²²⁾」ことができるのである。ここには、自我と社会（共同体）を同一視する理想主義的考え方が色濃く反映しているといえる。

ミードはフィヒテを論じた文脈のなかで次のように述べている。すなわち、「われわれが所属する社会はわれわれに特有の自我を与える。われわれはそのような社会に属している。われわれはそのような社会に属するが故にわれわれであるところの存在となる。そしてそのような社会は自我の組織化されたものに他ならない。フィヒテがしたことは、すべての自我をそのように一つに組織化したところの絶対的自我を構想したことであった⁽²³⁾」。ここで、絶対的自我を一般化された他者に相当するものとして読みとることができるし、そうすることによって、ミードの思想的背景を知ることができる。

人々は一般化された他者を取得することではじめて他者と調和的で合理的な一体関係を取り結ぶことのできる共同体の成員となれるとされるのである。だからミードは「組織化された人間社会における複雑な協同過程や活動や制度的な機能遂行は、その活動に参加し、その社会に帰属している個人のすべてが……組織化された社会的全体との関連で、他のすべての個人の態度をとりあげることができ、それに従って自分自身の行動を支配できてはじめて可能になる⁽²⁴⁾」と論ずるのである。一般化された他者という形をとることで、共同体がその個人メンバーの行為に支配力を発揮することになると叙述するのである⁽²⁵⁾。

こうした論述は、ミードの理論が「自我を社会過程に従属するものとし、一般化された他者に支配的な位置を与えている⁽²⁶⁾」といった主張に根拠を与え

ることになるが、しかし、ミードにとって、個人は一方的に社会によってコントロールされる存在として措定されているのではない。ミードは「われわれは物事の秩序を改変できる。あくまでも頑張って、共同体の基準をより良い基準へ改変していくこともできる。われわれは共同体に拘束されているだけではない⁽²⁷⁾」と述べ「自分自身の態度で不断に社会に影響を与えていく⁽²⁸⁾」存在として個人を規定するのである。

また、「われわれは自分自身の態度を利用しながら、自分達の参加している共同体のなかにちがった〔新しい〕状況を現出させていく……ただし、それができるというのも、共同体の反応をわれわれが自分自身の心中で想起できるからである⁽²⁹⁾」と述べ「思考活動が、われわれ自身の行為のなかに状況を持ちこむ能力を行使して、状況をたえず変化させていくことに他ならない⁽³⁰⁾」ことを論証するのである。

以上のようにミードは自我（そこにおいてはたらく思考過程）を媒介にして、個人と社会を統合的に把握する論理を形成しようとしたといえる。方法論的全体主義とも、方法論的個人主義とも異なる個体と全体との関係を統合的に把握しようとする立場であったといえよう。それは行為が有機体あるいは環境によって一方的に決定されるとする考えに対立するものであり、環境の規定力と選択的個人に共に重要な役割を与えている理論である⁽³¹⁾。

こうしたミードの個体と全体との統合の論理は、小集団にはじまって、地域社会、全体社会としての国家、そして国際社会や人類社会に到るまで拡大的に適応されるのである。

ところで、当時のアメリカ社会は、19世紀後半から資本主義が高度化して独占段階に突入していく一方、産業化、都市化の進行のもとで移民の急増や人種問題といった事態が発生し、矛盾に満ちた複雑な様相を示すようになっていた。ミードがこうした現実に見目であったのでも、無関心であったのでもなかったことは、かれが職業教育の問題に深い関心を示し、移民問題に積極的な提言をしていたことからもうかがえる⁽³²⁾。

ミルズは『社会学とプラグマティズム』のなかで、社会進化論が支配的な状況のもとで、生物学的決定論と打算的個人主義とに対抗して、ミードが合理性

（合理的協力関係）と個性（個体の創造性）との間の緊張に橋渡しをしようとしたと述べている⁽⁸³⁾。人格を備えた人間の形成に社会的な力が作用することを認め——教育の重視につながる——、また社会性というところに合理性が存在することを主張しつつ、他方で、特色のない順応的で個性の喪失を意味する社会決定論を避け、創造的で変革的な活動の中核をあくまでも個人に求める立場を確立しようとしたと説明している⁽⁸⁴⁾。

こうした課題に対する格闘の理論への反映が自由な個人である主我「I」と社会的合理性を示す客我「me」を統合しようとする試みであったといえよう。「me」とは個人にある反応を要求する組織化された共同体の表象であり、「I」とは、そうした要求に対する自発的な反応を示す⁽⁸⁵⁾。

現実において個人と社会が調和的に統合されており、自我内部に葛藤が生じることがなければ、客我「me」としての側面だけで済むことになる。しかし、ミードは社会が対立、矛盾をはらみ、個人と社会の間に分裂が生じ、自我が葛藤を含んだものとなっていることを見抜いていた。そこに、共同体の習慣的態度である「me」を更新するものとしての「I」が要請されてくる背景をみてとれる。

「me」としての側面を欠いては、個人は他者との合理的な協力関係をもてない。しかし、「me」は便宜的、慣習的な個人であり、その側面だけに支配されれば、個人は習慣的な共同体の要請に反応するだけの存在となってしまう。これでは、矛盾した社会を改革する展望も、創造的存在としての個人も確立できない。かくして、組織化された他者の態度のセットである「me」に対する新しい応答であり、個人の革新性、創造性といった側面を表現している「I」が要請されることになる。

こうした「I」と「me」の統合によって、一方で合理的に共同関係を組織し、他方で創造的、革新的に環境にはたらきかける自我が構成されるとミードは考えるのである。「両者をまとめると社会的経験のなかにあらわれるところの人格が構成される。自我は本質的に、こういうふたつの識別できる側面をとれないながら進行していく社会過程である。もしも自我がこういうふたつの側面をもっていなかったなら、自覚的な責任というものはあり得ないし、経験の

なかに新しいものが発生することもあるまい⁽³⁶⁾」とミードは論ずるのである。

ただ、アメリカ社会の解体は、まだあくまでも部分的なものに止まっていた。矛盾は未だ全面的に展開するところまでにはいたらず、矛盾や葛藤は調整可能な一時的現象として考えられていた。相対的好況期という経済的状况を背景に、個人と社会の相互的發展に対する信頼を内容とするミードの楽天的進歩観は大きく揺らぐことはなかったのである。

さらに、このような現実的背景の他に、ミードの論理展開の底に、ヘーゲル弁証法の進化論的解釈といったものが存在していることをしっかりおさえておく必要があると思う。ミードはヘーゲルを論じた文脈のなかで次のように述べる。すなわち、「進化論の中心的问题是、進化の過程が、それを進行させている諸条件に応じてその形態を決められるということを認識することである。…ロマンティックアイデアリストはこの進化の過程を最初、経験における自我——非我の過程と同一視しようとし、次には、この自我——非我の過程を主体——客体の過程と同一視しようとした⁽³⁷⁾」。「人間はかれの環境をコントロールする状況にまで到達した。そのような進化の頂点に達したのは個人としての人間ではなく社会である。……それは社会の組織化を通じて生じたコントロールである⁽³⁸⁾」。

このように、ミードはヘーゲルのもっていた主体——客体の論理——弁証法的認識論を進化論における生物体と環境との相互作用過程の論理のレベルへと換骨奪胎したのである。それによって主体——客体のダイナミックな緊張関係は失われ、社会変動は平板な量的なものとなり、歴史がはらむ変革の力は失われてしまったのである。歴史性が失われただけでなく、対象（客体）は単に環境という用語で一括的に表現されることになり、対象がもつ構造を把握する途もとぎされてしまうことになってしまったといえる。

ミードにおいては、個人（主体）は小集団を中心として同心円的に人類社会にまで拡大する社会過程へ参与することで、そのまま同じように自我を発達させていける存在であった。それはまた、創造的に社会にはたらきかける一方、合理的な協力関係を形成する存在であった。しかし、現実の社会は矛盾、対立を含んだ動的な過程にあるものであり、ミードが考えたような個人と社会の相

互的關係は存在していないのである。個人の社会過程への関与がそのまま直線的に自我の発達、人間の諸潜勢力の全面的展開につながるようなことにはならないのである。人々は疎外され、物象化された関係のなかで人間としての本来性を喪失しているのである。ミードには疎外や物象化を歴史過程に位置づけて把握するといった視点は存在していない。労働と関連させて、人間主体が生み出した客体であるものがどのようにして人間主体を疎外するようになるのか、人間と人間の関係が如何にしてモノとモノとの関係へと転化して人間の活動を規制してくるのかといった問題を解明する論理は存在していないのである。こうした問題の解明にはミードを超えて一步を踏み出すことが必要である。しかし、その前に、本稿では、もう一度ミードの意義と問題性を確認するためにも、ミードの主体的側面を継承したとされるシンボリック相互作用論の検討を行うことにしたい。

三 主体性理論とその問題

D. ロングによれば、今日の社会理論は、社会規範を内面化し、他者の期待に順応することによって、好ましい自己イメージを求めようとするような人間像を描いている⁽³⁹⁾。このような過社会化された人間観は、パーソンズの役割理論において最も顕著に見出せるものである。パーソンズは役割を役割期待として使用する。しかも役割期待とサンクションは互換的な関係にある。つまり、自己にとってサンクションであるものは他者にとっての役割期待であり、他者にとってサンクションであるものは自己にとって役割期待であることになる。役割期待に従って行動することが役割行動を遂行することであり、各々その期待は、一般に、分有された共通の価値志向パターンに関連し、統合化されているのである。このようなパーソンズの考え方においては、役割行動とは規範的期待への同調行動を意味し、役割は、社会体系の維持、安定に寄与するものであり、人間は社会的に統制されながら役割行動をする存在として考えられているのである。

このようなパーソンズの理論に対して、それを社会統合の理論であると規定し、それに替えて闘争理論を提唱するダーレンドルフの社会理論——そこにお

いて提示されたホモ・ソシオロジクスとしての人間像——も多分に過社会化された人間観を含むものとなっている。ダーレンドルフは社会的分析の基本的カテゴリーとしての社会的役割の三つのメルクマールとして以下のごとき内容を提示する。すなわち、第一に、社会的役割は地位と同じく、行為規定の客観的で個人から基本的に独立した複合体である。第二に、社会的役割に特有の内容は、ある個人によってではなく、社会によって規定され、あるいはかえられもする。第三に、役割に束ねられた行為期待はある要求義務をもって個人と結びつく。その結果、行為期待から逃れようとする場合には、かれはかならずサンクションを課せられ不利益をこうむる⁽⁴⁰⁾。このように個人と社会の媒介は、個人が行為したり、社会関係を維持したりすることによってではなく、行為する個人と前もってきめられた行為型式が遭遇することによってはじめて可能になるとされるのである⁽⁴¹⁾。かくして、社会的役割は、罰せられることなくしてはそこから逃れ得ない腹立たしい社会的事実として個人を拘束してくるのである⁽⁴²⁾。

このような、社会の鑄型に個人をはめこむことによって社会が個人を一方的にコントロールするといった個人——社会観に対して、個人は社会の側からの役割期待に一方的に順応するのではなく、むしろ積極的に社会にはたらきかけ、それを創造的に形成していく存在であるという視点を展開しているのが今日のシンボリック相互作用論である。

与えられた役割に受動的に従うことは役割取得のなかの単なる一つのケースに過ぎず、役割期待を選択し、修正し、改変して新たなものをつくりだしていくものとして役割行動を論ずるターナーの〈役割取得〉〈役割形成〉の考え⁽⁴³⁾方など、その一つの典型であろう。

それはまた、規範に対する行為の優位——対象（客体）に対して主体が能動的にはたらきかける側面の重視——を前面にうちだした理論の展開になっているといえる。

ブルーマーによれば、ミードにとって対象（客体）は人間の構築物であって内在的性質をもって自存しているような実体ではなく、対象（客体）の性質は、それらに対する人々の志向や行為に依存しているとされる⁽⁴⁴⁾。さらにブ

ブルーマーは次のごときテーゼをシンボリック相互作用論の三つの前提として提示する。すなわち、第一に、人間は、ものごとに対して、それが人間にもつ意味に従って行動する。第二に、そのようなものごとの意味は、人間が他の人間と行なう社会的相互作用からひきだされ、またそこから生じてくるものである。第三に、これらの意味は、人間が、かれの直面するものごとを取り扱うときにおこなう解釈過程において操作され、それを通して修正されるものである⁽⁴⁵⁾。

以上のようなブルーマーの所論において、個人が、彼に作用を及ぼす先在の対象（客体）である環境によって支配されるようなものではなく、進行する行為に基いてその対象（客体）を構築する存在として措定されていることを理解できる。個人の行動が、環境上の諸力によって決定されるのではなく、むしろ彼が構築する行為においてそうした要素を如何に解釈し、取扱うかということに基いていることを知ることができる。すなわち、「個人の行為は構築であって放散ではなく、かれが行為する状況の認識と解釈を通じて個人によって作りあげられるものなのである⁽⁴⁶⁾」。こうした考え方には、過社会化された人間像とは好対照をなす主体的人間観が示されているといえよう。

ところで、前節でも触れたように「me」は便宜的で習慣的な個人であり、こうした組織化された態度のセットであり個人を統制する「me」に対する新しい応答が「I」であり、それは個人の創造性、革新性といった側面に相当するものであった。今日のシンボリック相互作用論は、ミードの自我における「I」の側面を強調することで人間の主体性を前面におしだそうとしているといえる。

1960年代から70年代にかけて、機構の巨大化と共に進行する管理社会化のなかで、人々がオーガニゼイションマン化し、陽気なロボットになり下っている一方で、人種問題、世代間対立、ベトナム戦争といった社会問題が頻発し、社会の矛盾、対立が深刻化していく状況のもとで——社会の矛盾と統制が共に進行するなかで——自由で自律的な人間存在の危機に対処して、矛盾の克服を客我「me」によってではなく、自発性や革新性を表現する主我「I」によって達成しようとしたものと評価できる。

しかし、問題はミードの主我「I」というものがミードの理論においてどのような位置を占めているのかということである。「I」と「me」の相互過程として自我が統合されているという把握はよいにしても、それが（特に思想的背景を踏まえた）理論全体のなかでどのような位置を占めているのかをもう一度検討してみる必要があるであろう。そしてそれは、シンボリック相互作用論の〈主体性〉の射程をみきわめることにもつながるであろう。

社会矛盾が深まるなかで共同体の習慣的態度である「me」を更新するものとして「I」が要請されることになったという論理については前節で触れておいた。大恐慌の発生と共に深刻化することになったアノミー状況のなかで一般化された他者が分解し、社会の再組織化が困難になった状況で「I」が要請されることになったという説明⁽⁴⁷⁾も説得力をもった論理である。しかし、ミードにとって秩序の再建とは現在の問題関心に基いた新しい視点から（新しい自我の立場から）過去を把え直すことに他ならない⁽⁴⁸⁾。あくまでも古き良き時代のアメリカ・コミュニティを理想モデルとしてその再興を願っていたことには違いはない。ロマン主義的発想の色濃く反映した考え方であったといえよう。いずれにしても、そこには時代矛盾をダイナミックな変動としての歴史過程に結びつける視座は存在していないのである。

進化論を底にもつプラグマティストにして機能主義心理学者ミードという姿をもう一度ここで想起し直さなければならないであろう。ミードにおいては、あくまでも、社会秩序を保ちながら、進化の過程のなかでその秩序を変化させるような方法を探究することに中心的関心があったのである⁽⁴⁹⁾。弁証法のダイナミックスに基く歴史過程ではなく、平板な進化の過程において社会変動を把えようとするとき、質的变化の推進力としての主体の姿は消失せざるを得ないであろう。

人間のもつ意識や意図を扱い得ないとしてパーソンズを批判したダンカンも規則的可変性（すなわち、行為者による規範の操作可能性）ということを述べているが、かれも結局は、シンボルがいかにして社会的統合を創りだし、維持するのかというところに問題の関心を集中させている⁽⁵⁰⁾。ミードの影響如何といった問題ともからんで、これもシンボリック相互作用論者の理論的射程を

示すものといえよう。

もう一つの問題は、主我「I」を前面におしだすことでシンボリック相互作用論者は人間の主体性——個体の対象（客体）に対する能動性——を理論化しようとしたわけであるが、それにもかかわらず、というよりはむしろ、その側面を強調する余り、社会によって個人が規定されている問題を等閑視しているように思えることである。ブルーマーにおいては、相互作用は不断に意味が解釈され修正される過程として把握されていた。しかし、それは対面関係を典型とする小規模な状況に限られ、全体社会との関連でそうした問題が扱われることはないのである。行為（の意味）の背景に存在する社会的文脈にまで分析の視線が達しないのである。今日のシンボリック相互作用論は、ミード理論そのものが担っていた社会構造の理論的把握の欠如ないし社会の構造的現実の軽視という欠陥を克服できないでいるのである⁽⁶¹⁾。その結果、具体的な社会構造と関連づけられることのない抽象的な主体が、環境という用語で一括される対象にはたらきかけるといふきわめて主観的——観念的な理論になってしまっているのである。

結 語

小状況における人間の能動性、創造性、主体性の解明に秀れた成果を収めたシンボリック相互作用論ではあるが、それは社会構造と歴史の変動を解析する視座を未だ有していない。対象のもつ客観的構造と法則を解明し、そうした文脈のなかに行為を位置づける試みが要請されているといえるであろう。また、そうした方向において、はじめて、個人を一方的に鑄型にはめ込み、その行為を統制してくるような特殊な規範を克服して、人間的諸力の解放と実現を担保するもっとも普遍的かつ人間的規範によって支えられる社会を展望する⁽⁶²⁾可能性も開けてくるのであろう。

（註）

- （1） G. H. Mead, *Mind Self and Society*, 1934, p. 136（稲葉、滝沢、中野訳『精神・自我・社会』, 1973, 147頁）
- （2） *ibid.*, p. 138（訳 149 頁）
- （3） *ibid.*, p. 171（訳 183 頁）

- (4) *ibid.*, p. 226 (訳 238 頁)
- (5) *ibid.*, p. 186 (訳 199 頁)
- (6) *ibid.*, p. 154 (訳 166 頁)
- (7) *ibid.*, p. 169 (訳 180 頁)
- (8) *ibid.*, p. 163 (訳 174 頁)
- (9) *ibid.*, p. 171 (訳 183 頁)
- (10) *ibid.*, p. 172 (訳 184 頁)
- (11) *ibid.*, p. 172 (訳 184—185 頁)
- (12) G. H. Mead, *Movement of Thought in the Nineteenth Century*, 1936, p. 381.
- (13) G. H. ミード, 稲葉, 滝沢, 中野訳, 『精神・自我・社会』, 274頁
- (14) G. H. Mead, *Mind Self and Society*. 1934, p. 98 (訳 106 頁)
- (15) *ibid.*, p. 98 (訳 107 頁)
- (16) *ibid.*, p. 99 (訳 107 頁)
- (17) G. H. Mead, *Movement of Thought in the Nineteenth Century*, 1936, p. 290
- (18) *ibid.*, p. 350
- (19) *ibid.*, p. 290
- (20) *ibid.*, p. 360
- (21) *ibid.*, pp. 349—350
- (22) G. H. Mead, *Mind Self and Society*, 1934, p. 155 (訳 166 頁)
- (23) G. H. Mead, *Movement of Thought in the Nineteenth Century*, 1936, p. 101
- (24) G. H. Mead, *Mind Self and Society*, 1934, p. 155 (訳 166—167 頁)
- (25) *ibid.*, p. 155 (訳 166 頁)
- (26) C. T. Gillin, "Freedom and the Limits of Social Behaviorism: A Comparison of Selected Themes from the Works of G. H. Mead and Martin Buber," *Sociology, The Journal of the British Sociological Association*, Vol. 9 No. 1 January 1975, p. 29
- (27) G. H. Mead, *Mind Self and Society*, 1934, p. 168 (訳 180 頁)
- (28) *ibid.*, p. 180 (訳 192 頁)
- (29) *ibid.*, p. 180 (訳 192 頁)
- (30) *ibid.*, p. 181 (訳 194 頁)
- (31) G. E. Swanson, "Mead and Freud: Their Relevance for Social Psychology," *Sociometry* 24 December 1961, pp. 327—328
- (32) 佐藤毅, 「プラグマティズムのコミュニケーション論」, 『現代日本のマスコミュニケーション』1, 1972, 163頁

- (33) C. W. ミルズ, 本間訳, 『社会学とプラグマティズム』, 1969, 335—362頁
- (34) 同書, 335—362頁
- (35) G. H. Mead, *Mind Self and Society*, 1934, pp. 177—178 (訳 190 頁)
- (36) *ibid.*, p. 178 (訳 190 頁)
- (37) G. H. Mead, *Movement of Thought in the Nineteenth Century*, 1936, p. 166
- (38) *ibid.*, p. 168
- (39) D. H. Wrong, "The Oversocialized Conception of Man in Modern Sociology", *American Sociological Review*, Vol. 26 No. 2 April 1961, p. 183
- (40) R. ダーレンドルフ, 橋本訳, 『ホモソシオロジクス』, 1973, 46頁
- (41) 同書, 45頁
- (42) 同書, 30頁
- (43) R. H. Turner, "Role-taking, Role Stand-point and Reference Group Behavior" in *The American Journal of Sociology* 61, 1956 や "Role-taking versus Coformity" in *Human Behavior and Social Processes*. (A. M. Rose ed), 1962
- (44) H. Blumer, "Sociological Implications of the Thought of G. H. Mead" in *American Journal of Sociology* Vol. 71 No. 5, 1966, p. 539
- (45) H. Blumer, *Symbolic Interactionism*, 1969, p. 2
- (46) H. Blumer, "Society as Symbolic Interaction" in *Human Behavior and Social Processes*, (A. M. Rose ed), 1962, p. 184
- (47) G. H. ミード, 稲葉, 滝沢, 中野訳, 『精神・自我・社会』解説部分, 387頁
- (48) G. H. Mead, *Movement of Thought in the Nineteenth Century*. Chap. III, 1936, pp. 51—65
- (49) *ibid.*, p. 366
- (50) H. D. ダンカン, 中野, 柏岡訳, 『シンボルと社会』, 1974
- (51) 佐藤毅, 「プラグマティズムのコミュニケーション論」, 『現代日本のマスコミュニケーション』1, 1972, 183頁
- (52) 田中義久, 『人間的自然と社会構造』, 1974, 27頁

(筆者の住所：国分寺市本多1—10—21 札の丘荘205)